

# としょかんNEWS 第98号



2015年5月9日  
湘北短期大学図書館

## 2015年購読雑誌、選抜総選挙！結果発表

今年も新入生対象に雑誌の購読に関するアンケートを実施し、ランキング上位の雑誌を図書館で購読します。投票の結果、「non-no」「ViVi」「CanCam」「Men's non-no」に決まりました。

### ● 雑誌人気ランキング

#### <女子>

	雑誌名	得票数
1	non-no	253
2	ViVi	214
3	CanCam	157
4	JELLY	120
5	Zipper	108
6	mini	106

#### <男子>

	雑誌名	得票数
1	Men's non-no	3
2	FINE BOYS	2

票割れや無効票が多かったため、  
男子の得票数が少なくなっています



## 読書ノートでポイントを集めよう！

湘北短期大学図書館では、みなさんが読んだ本についてメモをする習慣をつけることをオススメしています。そのために便利なのが「読書ノート」です。

この記録を続けていけば、自分が学生時代にどんな本を読んだか、その本から何を学んだか、どんなところに感動したか、振り返ることができます。また、レポートやゼミの参考文献リストとして活用しても便利！就職活動の際にエントリーシートや面接で自己PRするときにも役立ちます。ぜひチャレンジしてみてください。

### ● <読書ノート>をポイントに交換するには・・・

- ① 図書館で配布している<読書ノート>に読んだ本の感想を記入してください。
- ② 1シート(6冊もしくは4冊)記入したら、カウンターで提示してください。ポイント付与します。
- ③ 貯まったポイントは、1号館1階の引き換え機で各種チケットに交換できます。

### ● ポイントの対象になる本については、下の表で確認してください

対象	対象外
・文芸書 (児童文学・詩集・名言集を含む)	・マンガ
・実用書	・雑誌
・学術・専門書	・カタログ
・文庫	・資格試験
・新書	・料理の本
	・手芸/工作/スタイルブック
	・イラスト/キャラクターブック
	・絵本
	・写真集
	・占いの本
	・図鑑/事典
	・旅行ガイド

新学期が始まって一か月が過ぎました。生活のリズムが整って張りつめた気持ちも少し緩み頑張ってきた「こころ」に多少の疲れがでてきた頃でしょうか。

今回は、私自身が大学生の時に出会い、その後も折に触れ親しんできた一冊の本、神谷美恵子著『こころの旅』(みすず書房)を紹介しようと思います。この本は、精神科医である著者の視点から乳幼児、児童、青年、壮年、老年各期に分け、「人のこころの旅路」について書かれています。それぞれの時期ごとに精神医学の立場からの適切な指摘もさることながら、文学、哲学、宗教など幅広い視点からも書かれていて、とても親しみをもって読むことができます。また、ハンセン病療養施設 長島愛生園にて長年奉仕した経験から出てくる著者のあたたかい文章もこの本を何度も開かせてくれる所以でもあります。

例えば、著者は児童期である六歳頃から

十一歳ころまでに現れる顕著な特徴について、「学ぶこと」を挙げ、これは「人間一般を他の動物からきわだてて区別する本質的なこと」と言っています。この時期の子どもは新しい経験への欲求から「乾いた砂が水を吸い取るように自発的に何もかも覚えてしまう」と述べ、この自発性によって独学能力と思考能力を身に付けることが、一生のこころの旅を豊かにするもっとも大切な鍵であって、「どこにおかれても一生ひとりで学びつづけられる人を作るのが学校教育の目的」であり、「学ぶ楽しみ」を得ることで人生の大きな不幸の一つである「退屈」を避けることができるといいます。この記述には教育者としての大きなヒントや勇気を貰った気がします。この本は私にとって一生を通じてのこころの救急箱であり、これからも何度も読み返すでしょう。

みなさんも五月の心地よいこの季節、こころの旅に出てみませんか。

ここ2回、二・二六事件(1936年)による暗殺の惨状を記した。三度暗殺について言及するのは気がひけるが、もう一度お付き合い願いたい。五・一五事件について中学生用歴史教科書から引用すると、まず満州事変(1931年9月)の勃発から満州国建国(32年3月)にいたる経過の説明がなされ、「当時の内閣は、満州国の承認に反対する態度を取りましたが、32年5月15日、総理大臣の犬養毅は海軍将校の一团によって暗殺されました。これにより、政党政治は、その幕を閉じました」とある。欄外には事件を報じる新聞が挙げられ、その見出しは「首相遂に兇手に倒る―昨夜十一時廿六分絶命」とあり、「犬養は、おし入ってきた海軍将校に、『話せばわかる』と語りかけたといわれています」というキャプションが付いている(東京書籍)。

下村湖人は『次郎物語』第4部(冬芽書房、1949年)において、旧制中学5年の次郎をして「しかし、たった一人の年老いた総理大臣に、何人もの軍人がピストルを向けるほど卑怯ではないと思います」と配属将校の曾根少佐に向かって、言わしめている。また『佐高信の昭和』(角川学芸出版、2015年)は、「犬養毅は屋敷に乱入してきた陸軍の若い士官候補生と海軍少尉に対して、『まあ、靴でも脱げや。話を聞

こう』と言う。しかし、殺気立った青年将校たちは『問答無用、撃て!』と九発の銃声を轟かせ、時の首相を亡き者にする、「このやりとりに象徴されるように、『話せばわかる、話すことによって、理解を深めていける』という考え方が潰されて、『問答無用』の狂気が幅を利かせる世の中になっていったのです」と述べる。

佐高氏の一文は、犬養毅の孫娘・犬養道子氏の『花々と星々と』(中央公論社、1970年)において確認できる。道子氏は毅の落命するまでの一部始終を詳細に描いた。―「もう間に合わないかもしれない……」「いや間に合う、お祖父ちゃまは道ちゃんになら別れを告げて下さる……」まろぶがごとく私は庭に走り出た。まっすぐにあの榎の根もとに。涙はもはや涸れ、仰げば、澄んだ暁の空に星が無数にきらめいているのが見えた。待っても待っても、しかしお祖父ちゃまの魂は見えなかった。ただ星だけがまたたいて、しんかんと庭は冷え黙した。―そして「一条の紅が深い紫色の中で流れ次第次第に紫を呑みこみつつひろがって行った。それは政党政治議会主義が終り日本国がまちがいようもなく、軍独走の軌道の上に乗せられた、最初の朝の色であった。すべての朝と同じでありながら、しかし全く異なる朝であったのである」と記したのであった。